

---

# ハイビジョンスタジオ活用のメディア教育研究

—新スタジオでの授業実践報告—

柄窪優二 脇田泰子 小川真理子

---

## 1. はじめに

日本の地上波テレビ放送は、アナログ放送とデジタル放送が同時（サイマル）放送されていたが、2011年7月にアナログ放送が停止となり、一部地域を除いて完全デジタル化された。これによりテレビはデジタル放送の時代になり、映像は従来の4:3から16:9のハイビジョン映像が標準となった。

こうした地上波テレビのデジタル化は、2003年に東名阪でデジタル放送が開始されてから8年間の準備期間を経て移行した。テレビ事業者の間ではデジタル放送機材の導入やそれに伴う経費の増大が懸念されたが、結果的には大きな混乱はなかったようである。その一方、大学や専門学校などの映像制作系を中心とするメディア教育の現場では、ハイビジョン制作に対応する教育設備の更新が、それほど進んでいないのが現状のようだ<sup>1)</sup>。教育用テレビスタジオをハイビジョン化するには、設備導入費用が数千万円は必要なため、教育現場では大きな課題となっている。

こうしたなか、本学の文化情報学部メディア棟にあるスタジオも2000年に導入されたアナログ機材で構成された設備のため、ハイビジョン化に向けた検討を進めてきた。その結果、2011年の地上波テレビ・完全デジタル化やメディア情報学科の増設を契機に、2011年3月にデジタル化更新工事を実施することになった。工事はスタジオにあ

るカメラ(3式)や映像機器、VTR、映像モニター、音声ミキサーなど、照明機材を除く全ての設備をデジタル対応機材に入れ替えて、ハイビジョン対応の新スタジオとしてリニューアルするものである。スタジオは2007年度から文化情報学部メディア情報専攻学生を対象にした「スタジオ制作」の授業や「テレビ制作」関連の演習で積極的に活用されており、メディア情報学科の増設にともない、教育設備としての役割はさらに高まると想定される。

そこで本稿では、まず本学スタジオをハイビジョン化する狙いや新しく導入したスタジオ設備の概要を報告する。その上で、2011年度前期に開講した「スタジオ制作」(2クラス)の授業をモデルに、受講学生を対象にしたアンケート調査や教員の授業実践報告をもとに、新スタジオの教育上の効果や問題点、今後の課題などを考察する。

---

## 2. ハイビジョン化の狙い

### (1) ハイビジョン化の目的

本学のスタジオは、大学の授業、演習、卒業研究などの学生教育で活用することを目的に設置されていて、「スタジオフロアー」、「調整室」、「映像編集室」に分かれている。このうち「映像編集室」については2007年度から段階的にハイビジョン対応ノンリニア編集システムとその関連機材を導入し、2011年の段階でハイビジョン化はほぼ完了している<sup>2)</sup>。そこで今回は「スタジオフロアー」と

「調整室」の放送機材をハイビジョン対応にリニューアルすることが目的となる。

ハイビジョン化の狙いは、スタジオで16:9のハイビジョン映像によるテレビ番組を制作し、それをハイビジョン対応VTRで録画、再生できるようにすることである。このためカメラ3式、映像スイッチャー、映像モニター、VTR設備、音声ミキサーなど、主要機材を全て入れ替えることになった。本学スタジオは2000年に新設されたもので、機材は導入から11年経過して老朽化している。したがった通常の老朽化による設備更新を前倒して、デジタル機材を導入する形になった。スタジオ照明設備と調整室の操作卓(3卓)、大教室カメラ(アナログ対応カメラ)は継続使用することにした。

## (2) 設計コンセプト

本学のスタジオは教育用の設備である。したがって必要な番組制作機能を備えると共に教育用の工夫や配慮が求められる。またそうした前提条件をクリアした上で、設備導入費用を出来るだけ軽減するシステム構成が求められる。そこで文化情報学部では平成20年度から著者(柝窪)を中心に学部内に組織したスタジオ管理運営委員会で新スタジオ設備を検討し、具体的な基本設計を進めてきた<sup>3)</sup>。主な設計コンセプトは下記の通りである。

- ・HD-SDIで映像信号を処理するテレビ局と同等のスタジオ設備を構築する。
- ・設備導入費用を軽減するシステム構成をめざす。
- ・カメラは3台で、調整室のベースステーションで調整/制御できること。タリー、インカム、送り返し映像、スタジオカメラ用のビューファインダー、ズームデマンド、フォーカスデマンドを装備する。カメラケーブルは運用に支障なければどのような種類でも可能。
- ・映像スイッチャーはHD-SDI入力で8入力程

度が必要。大教室カメラ用にNTSC入力1系統、パソコン用にVGA入力1系統を用意する。映像モニターはマルチ画面表示を採用する。

- ・映像モニターは設備費用を軽減するため民生用液晶テレビを使う。このため映像モニター信号(HD-SDI)をHDMI変換する。モニターはスタジオフロアー・出演者用に26インチ2台、スタジオフロアー・見学者用に52インチ1台、調整室・スタジオ運用に52インチ3台の計6台を設置する。
- ・VTR設備はHD-SDIで入出力が可能なHDVレコーダー2台とする。2台とも映像出力をスイッチャーに入力して、録画・再生で使用できるようにする。
- ・音声ミキサーは、マイク用ファンタム電源を内蔵し、エコー等のエフェクト機能があり、スタジオスピーカーへの音声分配ができる機種を採用する。

## (3) 設備更新計画の概要

スタジオ設備の更新計画は、大学側で基本設計を実施した上で、文部科学省に対して平成22年度私立大学等研究設備費等補助金を申請し、総事業費の1/3に相当する補助金(578万円)の交付を受けて下記の通り実施した。

- ・2010年11月までに大学側で新スタジオの基本設計を完了し、仕様書を作成した。それをもとに放送システムメーカー3社に見積書を依頼した。
- ・3社から提出された見積書を検討して発注業者を選定した上で、11月末までに文部科学省に平成22年度私立大学等研究設備費等補助金を申請。
- ・2011年2月に文部科学省から補助金交付の内示を受け、業者にスタジオ更新工事を正式に発注。
- ・同年3月に工事を開始。既存設備を撤去した上で、新設備の搬入、据え付け、調整を実施。

- ・3月末に工事が完了し、大学側で検収したあと、新スタジオは大学に引き渡された。設備更新事業は予定通り完了、スタジオは平成23年度から運用を開始した。

### 3. スタジオ設備の概要

スタジオの主要設備（カメラ、スイッチャー、映像モニター、VTR）のメーカーはソニーで、音声ミキサーだけヤマハである。設備の概要を報告する。写真1はスタジオフロアである。



写真1 スタジオフロア

#### (1) カメラ

ソニーの XDCAM EX カムレコーダー「PMW-320 K」(写真2) 3台に、それぞれ5型液晶カラービューファインダーとズームデマンド、フォーカスグリップを装備した。調整室内に設置

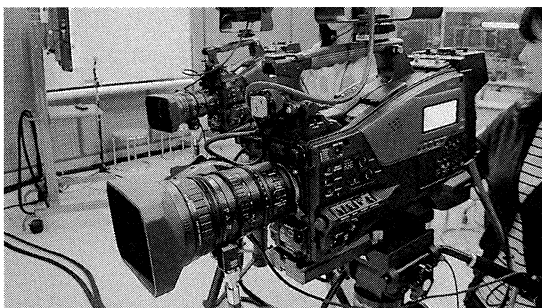


写真2 スタジオカメラ「PMW-320K」

した HD カメラエクステンションユニット「XDCU-50」で映像システムに接続し、リモートコントロールユニット「RM-B 150」(写真3)でカメラ調整できるようにした。オートフォーカス機能を備えている。



写真3 調整室内のカメラ調整ユニット

#### (2) 映像スイッチャー

ソニーのリモートカメラオペレーティングスイッチャー「BRS-200」(写真4)を採用した。8入力にするために HD/SDI 入力ボード「BRSA-20 HSDI」、アナログ映像入力に対応するためにビデオ入力ボード「BRSA-20 SAI」を追加したほか、パソコン入力に対応するためにスキャンコンバーター「HSC-7000」(イメージニクス)を導入した。



写真4 映像スイッチャー「BRS-200」

#### (3) 映像モニター

映像モニターは民生用テレビ・ソニー BRAVIA を使用し、26 インチ 2 台、52 インチ 4

台の計6台を使用した。映像モニターに使った液晶テレビにはHD-SDIからHDMIに変換した映像信号を接続し、52インチモニターは4台とも、スイッチャー出力（1画面表示）とマルチ画面表示を切り替えられるようにした。調整室(写真5)に52インチモニターを3台配置した。教育に配慮してスタジオフロアに見学者用にマルチ画面表示可能な大型モニター1台を配置したのは本学独自の工夫で、国内のスタジオではこれまであまり例がない。



写真5 調整室

#### (4) VTR

VTRはソニーのHDVレコーダー「HVR-1500A」(写真6)を2台設備した。このVTRは入力・出力ともにHD-SDIでの対応が可能で、2台とも出力信号をスイッチャーに入力して、録画と再生で使用できるようにした。映像編集室のVTRと取材カメラのフォーマットはHDVで統一されて



写真6 VTR「HVR-1500A」(2台)

いる。このため「HVR-1500A」導入とスタジオハイビジョン化によって、取材先で撮影してきたカメラ映像やノンリニア編集で制作したハイビジョン作品が、調整室の大画面モニターでプレビューすることができるようになった。

#### (5) 音声ミキサー、CD・MDプレーヤー

音声ミキサーはヤマハのデジタルミキサー「DM1000VCM」(写真7)を導入した。テレビ局やプロダクションでも使われている最新のデジタルミキサーで、音声本線のほかに、スタジオ送り返しスピーカー、スタジオの補助(リア)スピーカーにも必要な音声を分配できる。またエコーなどのエフェクト機能が備えられていて、このミキサーを使ってスタジオで簡単なライブステージなどの音楽番組の制作が可能である。このほか映像遅れに対応する音声delay(遅延)を設定することもできる。ミキサーに接続する形でCDプレーヤー/MDレコーダー「MD-CD1MKII」(TASCAM)を3台用意した。



写真7 音声ミキサー「DM1000VCM」

こうしたスタジオ設備と合わせ、取材用の業務用ハイビジョンカメラ「HVR-A1J」を三脚・マイク・ヘッドフォン込みで7式導入した。テレビ制作演習や卒業研究で利用するためである。

## 4. 「スタジオ制作」授業の実践

スタジオで開講する平成23年度の主な授業・演習は「スタジオ制作」=5クラス、「マルチメディア演習(テレビ制作)」=3クラス、「基礎演習B」=6時間×4クラス(オムニバス開講)である。本稿では前期授業「スタジオ制作」(2クラス)をモデルに新スタジオ設備の分析・評価を試みた。授業内容や到達目標などを紹介する。

「スタジオ制作」は文化情報学部メディア情報専攻2年生(以上)を対象とした専門教育科目(授業)だが「演習」に近い科目である。到達目標はテレビのスタジオ番組制作の基本を学んでメディア情報領域を実践的に理解することである。1クラスの定員は13人程度で、前期は柘窪が1クラス、脇田が1クラスを担当、助手・小川が授業補助を担当した。柘窪クラスと脇田クラスは基本的には同じシラバスであるが、柘窪はディレクター出身、脇田はキャスター経験者という関係で、指導内容は多少異なっている。授業補助者は学生がスタジオを使うためのスタジオ機器の事前準備と運用設定が中心であるが、担当教員と分担して学生を指導することもある。

授業内容は、1回目=スタジオの概要紹介、2~3回目=スタジオ運用の基本、4~14回目=番組制作の実習、15回目=まとめ、である。ただし平成22~23年度は、NHK名古屋放送局と東海テレビ放送、中京テレビ放送の協力で、全クラスがテレビ局で学外授業を3時間受講したので、大学スタジオでの授業は13回であった。この授業の特徴は、受講生全員が分担して、出演者、アナウンサー、カメラマン、ディレクター、スイッチャー、音声ミキサーといった、制作スタッフの役割を交代で担当し、実際にテレビ番組を制作することである。基本的な指導を受けたあと、担当スタッフの決定、企画会議、カメラリハーサル、本番収録、

反省会といった実習形式でスタジオ番組制作を学べるユニークな授業である。テレビの制作現場などへの就職をめざす学生は、その入門コースとなる授業である。また一般企業をめざす学生にとっても人(カメラ)の前でしっかりと話ができるようにトレーニングし、番組制作実習を通してコミュニケーション能力やバランス感覚、企画力を磨ける授業である。

## 5. スタジオ機能の分析・評価

### (1) 基本設計者のスタジオ評価

著者(柘窪)は基本設計者の視点で授業での使用状況などをもとにスタジオ機能を評価した。その結果は下記の通りである。

- ・52インチ大型モニター3台を調整室に配置し、マルチ画面表示させたのは、スタジオ制作の進行状況が一目で把握できて効果的だった。スタジオフロアーに配置した大型モニターも受講者のニーズに合致していた。
- ・新しいカメラはオートフォーカス機能があり、カメラ重量もやや軽くなったことで、学生は以前より使いやすくなったようだ。
- ・スイッチャーはシンプルな操作卓で必要な操作ができるので、学生の操作には適していた。簡易的な字幕スーパーの挿入も上手にできているようだ。
- ・旧スタジオではVTR操作は技術スタッフが担当していたが、新スタジオではAD担当の学生が教員(柘窪)の指導を受けて録画・再生の操作を行うことができた。VTRの操作やVTR入出力系がシンプルで簡単になったことで可能になった。
- ・音声ミキサーについても、フェーダー操作やスタジオスピーカーへの音声分配が簡単になり、授業進行の障害になるトラブルや不具合は全くなかった。CDやMDの再生はプレーヤー3

台が独立してミキサーに入力されているので、学生の操作性は高まった。

## (2) 学生のスタジオ評価

新しいスタジオ設備を評価するために、前期授業を受講した学生（2クラス＝25人）を対象にアンケート調査を実施した。調査では下記の質問7項目に対して5段階で評価してもらおうと共に、授業やスタジオ設備についての印象や感想を自由に書いてもらった。調査結果（回答の平均値）は表1の通りである。

〈アンケートの質問項目〉

Q1 調整室のモニター（大型3台）はどうですか？

Q2 スタジオのモニター（中型2台と大型1台）はどうですか？

Q3 カメラの使いやすさや操作性は？

Q4 スイッチャーの使いやすさや機能は？

Q5 VTR 設備（2台設置）については？

Q6 音声（ミキサー）関係の使いやすさや機能は？

Q7 スタジオ設備の総合的な評価は？

〈回答の選択枝…5段階評価〉

5 = 良い、4 = まあ良い、3 = 普通

2 = あまり良くない、1 = 良くない

表1 アンケート調査結果（平均値）

質問内容	回答
Q1 調整室のモニター	4.96
Q2 スタジオのモニター	4.88
Q3 カメラについて	4.80
Q4 スイッチャーについて	4.76
Q5 VTR 設備について	4.80
Q6 音声（ミキサー）関係	4.70
Q7 スタジオ設備の総合評価	4.92

授業やスタジオ設備に対する主な自由記述は下

記の通りであった。

- ・とても良いスタジオだと思う。大学にあるスタジオとは思えなかった。スタジオを使う授業をまた受講したい。
- ・少人数でこのスタジオを使って授業を受けることは、すごく贅沢なことだと感じた。様々な放送機材に触ることができて良かった。
- ・映像モニターの画質も良く、カメラやスイッチングも操作しやすかった。ハイビジョン化したスタジオを使うことができて良かった。
- ・音声再生デッキがCDもMDも両方使えるのが良いと思った。
- ・テレビ制作という難しい印象を持っていたが、様々な機材に触れ、番組を作る過程で打合せや話し合いをして、一つの番組を作ることで、達成感などを得ることができて良かった。

アンケート調査結果によると、全ての調査項目で回答（平均値）が4.7以上となっており、スタジオを使った学生が高い評価をしていることが浮き彫りとなった。学生はスタジオ使用経験がないので、この調査結果は必ずしも客観的な評価とは言えない。しかし自由記述の内容と合わせて、授業で使用したスタジオ設備に対して満足していることは確認できたと考えられる。

## (3) 教員（脇田）のスタジオ評価

教員（脇田）は、平成23年度前期も週1コマ（木・2限）の「スタジオ制作」を担当し、全面改装されたハイビジョンスタジオで、4月7日の“使い初め”以来、計13回の授業（NHK名古屋放送局に於ける6月18日の学外授業2回分を除く）を執り行ってきた。教員は放送記者、キャスターとして、スタジオ業務と長く関わってきた経験を踏まえ、学生（＝送り手）が制作に当たる“スタジオ番組”を、第三者（＝受け手）として視聴した際に、作品の内容と意図とが、よりわかりやすく伝わることを授業のテーマに掲げている。なぜ

なら学生は、このことを常に現場で最優先して考え、自ら動いていく経験を積むことにより、全体としてわかりやすい番組作りのエッセンスを体得し、作る喜びを知っていくからである。またその喜びこそが、映像制作との出会いを果たしたばかりの初心者にとっては、先への意欲をかき立て、持続させていく上でも、何より重要だと考えるからである。

そのためには、撮影映像がタイミングとリズム感の良いスイッチングによって活かされるとともに、ごく自然に感じられる流れに沿って、出演者間でコメントが交わされることが不可欠だ。では、そうしたストーリー展開に即し、かつ、視聴者が見てわかりやすい映像を、どのように作ってあげればいいのか。学生は番組制作実習を通じて、それぞれの持ち場で判断し、互いに意志疎通を積極的に図るコミュニケーション能力を発揮し合うことにより、このとても大きな課題に毎回、取り組んでいる。したがって、彼女たち一人ひとりがスタッフとして、どこまでチーム全体の成果に貢献できる工夫を成し得ていけるかが、指導の主眼になる。

この点で、昨年度の技術担当だったNHKメディアテクノロジーのスタッフに代わり、小川助手が授業補助に加わった今春からの制作環境と体制とは、一言で非常にシンプルになった。雑事に追われることなく、課題内容に、より集中して取り組めるようになった、というのが率直な感想である。雑事とは、昨年度までは技術面で、多少なりとも常に神経を使わざるを得なかった状況や、時として、それでも発生していたトラブルへの対応を意味する。昨年度中にそれらの事態を「煩わしい」と認識していた訳ではないが、今年度に新スタジオで同じ授業を行ってみて、初めて、そうした余計な状況からは解放された、という感覚を持ったのである。より具体的に、現スタジオでは、

①調整室におけるVTR操作時の誤作動がなく

なった。

- ②音声効果（フェードやマルチオーディオミキシング）を実習するために従来、必要だった技術サイドによる複雑な作業が省かれ、プリセットで誰もが教われれば、スイッチ一つで操作できるようになった。
- ③同一の音源メディア同士（CDとCD、MDとMDなど）の連続再生が可能になり、音声面での選択肢の幅が広がった。
- ④スタジオカメラにオートフォーカス機能が加わり、カメラの操作自体が楽になった結果、学生は撮影内容に、より意識を集中させることができるようになった。

などの顕著な変化が感じ取れた。機材の操作性が大変、スムーズであることに加え、小川助手の適切な判断と対応により、制作側は技術的な困難を何ら感じることなく、番組進行本位に制作内容への取り組みに没頭していくことが可能である。

この授業に関しては、昨年度にスタジオを使用した経験を持つ学生は皆無だが、調整室の使い勝手の良さに加え、モニターの52インチ大型ハイビジョン画面（マルチ）に映し出されたクリアな映像が、彼女たちにとっては、不可欠なものであったと改めて痛感する。生まれながらに映像と慣れ親しんで育ってきた世代は、自ずと、より高画質な映像を求める傾向が特に強いからだ。また前期授業期間には、7月24日の地上完全デジタル化移行という放送史的にも稀有な場面に立ち会えるタイミングもあり、デジタル映像の持つ意味を、ハイビジョンスタジオへのリニューアルとともに、身を以って感じ取ろうとする学生も少なくなかった。

本格的な映像制作と初めて向き合った（映像編集経験者が仮にいたとしても、ここまで大掛かりな機材を駆使して、チーム全体で一つの番組を作るという意味で）学生たちが、技術的にもより優れたスタジオ機能に日々、触れながら、映像への関心をさらに深めていってくれることを願ってや

まない。

#### (4) 教員（柄窪）のスタジオ評価

教員（柄窪：平成23年度前期1クラス担当）の視点で新しいスタジオ設備を一言で評価すると、スタジオ運用が安定し、スタジオ機能が強化され、教育の質が向上したことが最大のメリットだと考える。

スタジオ運用は前年度までNHK関連会社に管理・運用を委託していて、専門の技術スタッフが授業に立ち会っていた。運用上のトラブルは多くはなかったが、音声分配系を中心に運用上の不具合がときどき起きていた。今年度からは管理・運用を助手が担当する形に変わって、スタジオ運用に関わる専門性は低下した。しかしながら前期授業での運用トラブルは全くなかった。新スタジオは映像・音声とも信号系統がシンプルで、教員にも学生にも使いやすいスタジオ設備だということが確認された。

スタジオ機能面から評価すると、音声のCD/MD再生機が3台備えられたことや、タブレット端末やPC等からミニジャックでミキサーに音声信号を入力できることから、音楽や効果音の使用が容易になった。このためクイズ番組等はテレビ局と同等レベルの音響効果をめざすことが可能になった。またデジタルミキサーの導入で、マイクのエコー効果処理やスタジオ送り返し音声の細かい設定が可能となった。このためオープンキャンパスでは音楽番組（ミニライブ）の制作も可能になった。

映像関連では、パソコン画面をセレクトできるようになったので、字幕スーパーの挿入だけでなく、パソコンで作成したライブCG画面を使った番組企画ができるようになった。VTR設備はHDVフォーマットの録画・再生機を2台導入したが、取材用カメラや編集室と同じフォーマットに統一したので利用範囲が広がった。授業で制作したスタジオ番組を録画・再生するほか、ハンディ

カメラで撮影した取材映像や編集済みの作品をレビューするのに効果的に活用できた。

このほか調整室は、旧機材の撤去でスペースが広がったことから、スタッフ全員で反省会ができるようになった。調整室での反省会は、検討箇所をVTRで繰り返し確認できるので、教育効果が向上した。また基幹演習のPCプレゼンでも調整室を活用するなど、設計段階では想定していなかった利用も広がった。「スタジオ制作」を中心とする前期授業を振り返ると、新しいスタジオ設備導入のメリットは極めて大きく、現時点ではスタジオ設備面の問題点は見当たらない。

#### (5) 授業補助者のスタジオ評価

助手（小川）は教員2人が担当する「スタジオ制作」の授業補助を行った。その経験のなかで印象に残ったのは、新スタジオでは、ハイビジョンカメラや他のデジタル化された機材の使用が教育用に特化されたことで、学生が授業に生き生きと参加する様子を多く見られたことである。実際に、学生は複雑な機材の操作性に捕らわれることなく、スタジオ設備を積極的に利用しながら授業に自主的に参加していた。例えば、番組制作後に必ず行われる大型モニターでの作品のレビューと反省会で、学生は自身のポジションの成果を確認するだけでなく、客観的に他の学生の役割や番組全体の評価を行い、さらには自分が次に担当するポジションのヒントまで読み取っていた。このような積極的な利用の背景には、大型モニターの映像が、学生の映像分析に適したハイビジョンの鮮明な画質であることと、初めてカメラを使用する学生にも使いやすいようにオートフォーカス機能を活用したことがあるようだ。

また調整室にあるスイッチャー、CD/MDの再生プレーヤーやVTRの操作は、1回の指導で、学生はそれらの基本的操作を習得することができた。そのため、学生が自ら次の担当の学生にその使い方や自分たちなりの工夫の仕方を伝えるとい



う積極的なコミュニケーションの場をよく目にすることができた。

さらに、学生たちが企画したイントロクイズでは、音声担当の学生は自分の i-phone の音源から効果音をデジタルミキサーへ入力することを提案した。AD 担当の学生は、字幕スーパーを発展させて、画面全体にひとつの映像（ライブ CG 画面）としてクイズの質問を映し出すことにチャレンジしたため、カメラで捉えた映像だけではない変化を番組に加えることができた。このことから助手（小川）は、教育用に特化された新スタジオの設備は、テレビスタジオという専門性に縛られることなく、日常的に様々なデジタル機器と接している学生を積極的に受け入れる柔軟性も備えているように思う。

## 6. 今後の課題

新しいスタジオ設備について、受講学生を対象にしたアンケート調査や教員の授業実践報告をもとに、分析・評価を試みた。運用開始から半年が経過した時点では、スタジオのシステム設計に問題はなく、設備導入の狙いは達成されたことが確認できた。ということは、次の課題はスタジオを使った授業や演習で何を教えるのか、という教育の狙いやその環境整備になる。

本稿で分析モデルにした「スタジオ制作」授業は、文化情報学部メディア情報専攻の2年生（以上）を対象とした専門教育科目である。授業の狙いは、スタジオを使った番組制作の基本を学ぶことで、マスコミ・テレビ業界への入門コースとも言える。授業を通してコミュニケーション能力やバランス感覚、企画力を養うことを目標にしていて、一般企業をめざす学生も多く受講している。選択科目であるがメディア情報専攻学生の9割が履修している。

文化情報学部では、平成23年度にメディア情

報学科を増設して、来年度からこの科目は「テレビ制作基礎」という形で開講する。こうした前提で考えると、最大の課題は受講希望者の増加への対応である。新学科は現行の2倍近い学生が受講を希望する可能性がある。この科目はスタジオを使って番組を制作していくため、少人数クラスでのきめの細かい指導が不可欠である。このため1クラスの定員をどの程度で抑えられるのか、何クラス開講するのか、教員が不足した場合の対応などが課題になってくる。

こうした点を考えるときに重要なのは、メディア情報学科におけるテレビ制作関連科目の狙いや目的である。新学科では、1年生で「テレビ制作概論」、2年生で「テレビ制作基礎」、3年生で「テレビ制作演習」という科目を開講するが、基本的な視点は映像ジャーナリズム教育である。したがって撮影や編集などの制作過程を支える技術スキルに加え、企画力や構成力、取材力、プロデュース能力など、作品全体に対する視点や目配りに関する指導領域が非常に重要になる。「テレビ制作基礎」は初心者対象の専門科目としての役割は大きい、「テレビ制作演習」「卒業研究」に向けた教育体系のなかでは、あくまでも入門コースの授業である<sup>4)</sup>。全体の方向性としては Web 映像公開を視野に入れた映像メディア教育がメディア情報学科の教育レベル向上に大きくつながると考えられる。そうした意味では、新スタジオは取材カメラや編集室と同じフォーマットの VTR が設備され、調整室で取材映像や完成作品をプレビューできることが最大のメリットとも言える。今後はハイビジョン化したスタジオエリアとノンリニア編集室とが調和する形で、スタジオを効果的に運用することが教育効果を高める重要なポイントになると考えられる。

今回の新しいハイビジョンスタジオは、学生教育に必要な機能を集約した上で、設備導入費用を限りなく軽減して、本学が独自に基本設計してメーカーに発注したものである。納品した放送機

器メーカーからは、スタジオ機能と導入費用（コストパフォーマンス）のバランスの取れた優れたシステム構成だと高い評価を受けている。他大学などの教育関係者の視察や見学も相次いでいる。「スタジオ制作」授業の学生アンケートでは、この授業を履修して良かったか？ という質問に対して、「良かった」= 24人、「まあ良かった」= 1人。授業内容に満足しているか？ という質問に対して「満足している」= 23人、「まあ満足している」= 2人と、大部分の学生が高い評価をしている。このスタジオを有効に活用して、メディア情報学科の教育内容をさらに向上するには何が求められるのか、来年度以降も学生への教育を実践しながら探りたい。

本研究は平成 23 年度椋山女学園大学研究助成金(C)による研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 1) 栢窪優二 (2008) 「デジタル放送時代のメディア教育に関する一考察」、日本マス・コミュニケーション学会、春季研究発表会要旨 27-28
- 2) 栢窪優二、亀井美穂子 (2010) 「地域連携型メディア教育実践の試み—ハイビジョン映像で情報発信」、椋山女学園大学文化情報学部紀要第 9 巻第 2 号 25-32
- 3) 栢窪優二、亀井美穂子 (2010) 「デジタル放送時代のメディア教育を探る—映像制作指導の現状と課題」、椋山女学園大学文化情報学部紀要第 9 巻第 1 号 39-47
- 4) 栢窪優二 (2011) 「インターネット時代の映像メディア研究—地域連携プロジェクトからの報告」、椋山女学園大学文化情報学部紀要第 10 巻 61-69

とちくぼ・ゆうじ / 文化情報学部教授  
E-mail : tochikubo@sugiyama-u.ac.jp  
わきた・やすこ / 文化情報学部准教授  
E-mail : wakita@sugiyama-u.ac.jp  
おがわ・まりこ / 文化情報学部助手  
E-mail : m-ogawa@sugiyama-u.ac.jp